

12/20

紙面送付

森 一久 様

memo

「北極の死の灰」の研究について適切なコメントをいただき、あらためてお礼申し上げます。
談話を掲載した大阪の朝刊(20日付)を同封します。

あわただしい取材で、たいへん申し訳ありませんでした。

でも、そのおかげで、大阪の方は1面トップで扱っています。

森さんの談話は、関西一円に配達された20日付の朝日新聞朝刊にすべて掲載できました。

ただし、最終版(大阪市内分)は行数が削られましたが。

大阪の朝刊13版(大阪をのぞく関西)と14版(大阪内)の紙面を送ります。

東京方面は研究の本文は掲載されたのですが、森さんの談話は残念ながら割愛されました。

工藤さんは、森さんの談話にたいへん喜んでおられました。

私が工藤さんの取材をはじめたのは15年ほど前からです。研究成果はすでに何度か大阪では記事にしているのですが、なかなか東京の紙面に載らず、核問題をめぐる「東西格差」に苦慮していたところです。今回の記事で、工藤さんの研究が改めて評価されるといいのですが。

第五福竜丸の安田さんとはビキニ50年の取材で親しくしています。

来年は被爆60年で、その取材に専念するつもりです。

森さんは広島出身だと伺いました。被爆者問題についてまた改めて取材する機会があればと念じています。

どうぞ、今後ともよろしくお願い申し上げます。

From 中川 正美(朝日新聞大阪本社編集委員)

朝日新聞大阪本社

郵便番号530-8211

大阪市北区中の島3-2-4

Tel:06-6231-0131(代表・内線5527)

06-6229-1325(直通) 携帯電話090-9042-7969

Fax:06-6222-0280

E-mail:shousan@attglobal.net

中川正美

2004.12-20 朝日新聞 13版1面

北極氷河「死の灰」計測

広島、長崎に投下された原爆やヒキニ水爆実験がもたらした核時代の「死の灰」が、北極の氷河から検出された。工藤章・京都大学名誉教授（現・吉備国際大学政策マネジメント学部長）の研究チームが、1945年以降の積雪でできた氷塊から核分裂で生じる放射性元素を計測し、年代別に分析した。大気圏核実験は80年までに計510回あまり繰り返されたが、いずれも地球規模で広がった放射能降下物をまき散らす「落ちない爆弾」だったことが裏付けられた。

核実験の年代ごと 汚染実態明らかに

京大名誉教授チーム

セシウム137 放射能計測
性降下物の一つで、核分裂で新たに生まれる。ガンマ線を放射し体内に取り込ま

れやすい。半減期は約30年。工藤名誉教授らの研究チームは、北極の氷塊の中からごく微量のガンマ線を計測する方法を開発

し、1平方メートルあたり約0.03ベクレルまで検出精度を高めた。ベクレルは放射能の強さまたは量を表す単位。

調査地点は、カナダ・エルズミア島のアガシー氷河。工藤名誉教授はカナダ国立科学研究所の主任研究官だった94年、北緯80度で10カ所の採取地を選び、30年代以降に積もった雪が固まった約14分の深さまで掘削。氷塊を年代別に特定し、蓄積したセシウム137を10年がかりで計測した。計測結果によると、45



年から80年までの氷塊に含まれていた同元素は総計で1平方メートルあたり495ベクレル。年代別にみると、広島、長崎型を含む50年代初めまでの原爆初期のころ、氷塊から検出されたのは年平均で同約0.5〜1ベクレル。ところが、米国の水爆実験を始めた52年以降、数値は急上昇する。ヒキニ事件を起こした爆弾「ブラボー」（15トン）を含む6回の水爆実験があった54年の年間数値は同約10ベクレルだった。ヒキニ事件をきっかけに、米国は放射性降下物を少なくする「きれいな爆弾」の開発を進めた。だが、その最初の実験となった58年でも同約50ベクレルを検出。米英ソの核実験が集中した60年代初めには、同1000ベクレル近くに増えていた。